

# 筑波大学 2005 年度学類留学生のための日本語検定

木戸 光子 西村よしみ

## 要 旨

筑波大学では学類留学生の日本語能力および学習目的の多様化に効果的に対応するため、学類留学生の日本語日本事情科目の見直しを検討している。日本語日本事情科目を再構成するためには学類留学生の日本語能力の調査が必要である。そこで、2005 年 4 月に学類留学生 1 年生を対象に日本語検定試行版を実施した。本稿はその結果の報告である。

【キーワード】日本語検定 学類留学生 日本語日本事情科目

## The Japanese Proficiency Test used for First Year International Students in 2005 at the University of Tsukuba

KIDO Mitsuko, NISHIMURA Yoshimi

【Abstract】The University of Tsukuba is in the process of revising the Japanese/Japanese Culture course for undergraduate international students in order to deal effectively with the diversity in their Japanese language proficiency levels and learning objectives. This paper reports on the results of a proficiency test administered to first year international students on a trial basis in April 2005. Results of this survey of the international students' Japanese proficiency will be used to redesign the course.

【Keywords】Japanese proficiency test, undergraduate international students, Japanese/ Japanese Culture course

## 1. はじめに

筑波大学では学類に入学した留学生および帰国子女の日本語力を補強し、日本での勉学に適応すべく日本語・日本事情科目を開設している。しかし、近年、留学生の日本語力の幅が大きくなっている。中には日本語能力試験2級以下と思われる学生も見受けられる。また、帰国子女学生についても日本の高校から進学してきた日本人学生と遜色ない日本語力を持つ学生が多くなってきた。

このような学類正規生の日本語力・日本語学習の目的の多様化への対応するために、日本語の授業内容やカリキュラムの見直しを行う時期に来ている。そのためには、学類生の日本語力を判定し、学類の授業でどのような日本語力が必要とされるのかを把握する必要がある。

以上のような問題意識の下で、主に2005年度学類1年次入学の留学生を対象に、学類日本語検定試行版(以下、日本語検定と略す)を行った。

## 2. 日本語検定の作成と実施

(1) 実施時期：2005年4月実施

(2) 受験者数：32名

学年別：1年次27名 2年次4名、3年次1名

学類別：自然学類3名、社会学類2名、生物資源学類4名、比較文化学類2名、人間学類1名、工学基礎学類1名、工学システム学類4名。社会工学学類3名、情報学類3名、国際総合学類6名 図書館情報専門学群2名、芸術専門学群1名

(3) 検定内容：

文法レベル判定(10分)

SPOT (Simple Performance-Oriented Test) (10分)

作文(15分)

文法(30分)

講義の聴解・再生(12分)

要約(15分)

検定内容の～は、留学生センターの日本語補講コースのプレースメントテストと同じ試験である。これらの試験により、文法・聴解・作文の基本的な日本語力を見て、文法中心に日本語レベル判定を行った。

さらに、とで講義の理解と再生がどの程度か測った。は「地域通貨」に関する文章を講義調に話したものを約2分ビデオ録画し、キーワードとなる単語リストを見た上で、1回だけビデオ録画を見て、10分でできるだけ忠実に内容を再現するというものである。はと同じ内容の文章(書きことば)を渡し、15分で要約するものである。

### 3. 日本語検定の結果

～ の結果、文法中心の日本語レベルは中級前半～上級に分かれた。

表1 日本語検定結果 日本語レベル(日本語補講1～6レベルに相当)

日本語レベル	補講レベル	受験者数	授業参加の程度
初級	1～3レベル	0名	授業参加困難
中級前半	4レベル	2名	
	4(5)レベル	1名	授業参加できるが 日本語力の底上げが必要
中級後半	5(4)レベル	1名	
	5レベル	7名	
	5(6)レベル	7名	授業にほぼ参加できる
上級	6(5)レベル	1名	
	6レベル	13名	

4レベルは日本語能力試験3級～2級程度、5レベルは2級～1級程度、6レベルは1級以上にほぼ該当すると考えられる。なお、( )はレベルの判定で、+や-がついたものである。例えば、4(5)は4レベルだが5レベルに近い場合、5(4)は5レベルだが少し劣っている場合を指す。

なお、～ では、2名の日本語教師が順位をつけて評価した。今回は評価基準が統一できず、参考資料とした。

4レベルと判定された2名は、基本的な文法はできていたが、中級以上の文法や聴解・語彙の面で不足していた。～ の試験はほとんど書けていなかった。4(5)から5(6)レベルの16名は、中級までの文法はできるが、上級になるとできていなかった。上級と判定された6(5)と6レベルの14名は、～ の試験はできていたが、～ の特に～の再生ができる者とできない者に分かれた。

### 4. 日本語科目に関わる問題点

本学では、日本語科目の受講者の質の変化が問題になっている。留学生に関しては、日本語力の差の拡大、および、日本留学試験による渡航前入学許可による日本語力の可能性が懸念されている。後者は日本語学校などの予備教育期間なしに直接日本の大学へ留学可能になったことの影響も考えられる。ただし、今回の日本語検定では4レベル未満、すなわち初級レベルの学生はおらず、少なくとも中級以上の日本語力の学生が来ていることがわかった。

また、今回の検定では帰国子女学生は対象とはしなかったが、近年では日本語力にはほぼ問

題のない学生の増加、および、単位がとりやすいために日本語科目を受講する学生が問題視されている。単位の問題については、秋季入学のため、4月入学の学生に比べて、総合科目6単位や通年科目のある教職科目がとりにくく、総合科目に振替できる日本語・日本事情科目をとっているという事情もある。つまり、総合科目が月曜1、2限に開講されており、2学期と3学期にとっても最大4単位しか1年次にとれない。また、教職科目で通年で単位が出るものだと、1年次にはとれず、2年次からとらざるをえない、といった制約がある。そこで、総合科目を早くとって、2年次に教職科目、さらに専攻の必修科目などをとれるようにしておきたいとのことである。この秋季入学生の問題の解決には、総合科目6単位必修をもっと少なくする、通年科目を廃止して各学期で完結するようにするなど、大学の制度全体の変更が必要になるだろう。

## 5. 日本語科目への意見

日本語科目担当教員からの意見としては、学類生以外の留学生もいた前年度のほうがクラスが活性化するとのことである。2004年度は日本語科目を日本語補講が相互乗り入れし、学類正規生以外の留学生も受講できた。また、受講者のレベルや目的が一定でなく、毎学期どんな学生が受講するかによって違った対応をせざるをえないとの意見もあった。例えば、日本語力の底上げがかなり必要な留学生と、日本語科目が必要なさそうな帰国子女の一部がクラスに混在していた。

学生からの意見としては、日本語力を伸ばすために日本語科目をとりたいが、必修科目などと重なってとれないとの相談があった。留学生センターには日本語補講コースでも中上級日本語の授業が開講されているが、これは単位にならない。

解決策としては、学生の空き時間の制約を考えれば、日本語日本事情科目を曜日・時限を固定した時間割にして開講する、または、短期留学生がしているように日本語補講コースの授業を単位振替できる科目として大学が認める、ということが考えられる。

## 6. おわりに

以上、日本語検定の報告、日本語科目の問題点と考えられる解決策を述べた。今後の改善策としては、学生の日本語学習の選択肢を広げるということに尽きる。大学全体として日本語力を重視するなら、英語などの外国語と同様、日本語を大学の外国語科目としての位置づけをより明確にする必要がある。

今年度の日本語検定の結果、日本語科目においてはレベル別に受講科目を振り分けた。上級は「日本語演習」、中級は「日本語読解」「日本語作文」「日本語聴解」を受講するよう指導した。しかし、帰国子女学生の総合科目振替のための日本語科目受講の問題、レベルの低い学生が日本語科目が他の必修科目等と重なって受講できないという問題は未解決のままであ

る。学生の日本語レベルに応じた日本語教育の支援のためには、大学の教育制度、特にカリキュラムや単位認定の柔軟性が重要である。